

【研究ノート】

妙峰山のまつりと粥茶歌

松 家 裕 子

は じ め に

近時、中国の各地では、長いあいだ断絶あるいは衰微していた民間信仰やその祭祀が、改革・開放政策や経済的状况の変化によって復活、活発化しつつある。北京の西北 35 km の山間部にある標高 1038 m（主峰は 1291 m）の妙峰山、碧霞元君廟の旧暦 4 月のまつりもその一つである。このまつりは、1900 年以來の北京の混乱、1937 年の日本軍による堂宇の破壊、その後の文化大革命期の迷信破壊運動などによって途絶えていたが、1980 年代の中頃、当時の北京市長焦若愚の肝いりで廟が再建され、また 1990 年前後より、観光をおもな目的として北京市当局がまつりの復興に力を入れ、今日ではまつりを支える組織も多く復活して、にぎわいを取り戻しつつある⁽¹⁾。

筆者は 2001 年度追手門学院大学学内共同研究「アジア諸地域における祭の比較研究——国家・共同体・家族——」に参加し、妙峰山の碧霞元君廟とそのまつりについて現地調査 2 回を含む調査を行った⁽²⁾。筆者の主要な研究対象は中国の民間歌謡であるので、まつりにおける、あるいは信仰にかかわる民間歌謡などの民間文芸・芸能を調べることが第一の目的であった。さらに、実際のまつりやまつりを描いた図をとおして、民間文芸の源泉でありながらも、文献資料にはあらわれにくい、まつりの「聖」の部分、またこれに関連して、まつりにおける女性のありかたを考えることも視野に入れた。研究はまだ中途の段階であるが、ここにまつりで聴き得た民間歌謡をその背景とともに紹介して、中国におけるまつりの一端を示したい。

1 妙峰山のまつりの概要と茶棚

妙峰山の碧霞元君廟についてわれわれがさかのぼりうる最古の年代は、康熙 23 (1684) 年所修『宛平県志』巻 6 に引かれた張献「妙峰山香会序」に、「妙峰山天仙聖母」に供えものをしたという「己巳」の年、すなわち明の崇禎 2 (1629) 年である。その後は、山上に、1925 年の記録では康熙 12 (1673) 年以降の、また現在では康熙 28 (1689) 年以降の碑が残るものの、『日下旧聞考』や『順天府志』など北京の地誌にも触れられることはなく、清朝末期になってようやく文献に妙峰山やそのまつりのことがまとまって記載されるようになる⁽³⁾。これ以前のことにについて、たとえばこのまつりがどのようなにはじまり、どのような歴史をもつのかなどについては、よくわかっていない。しかし、妙峰山の碧霞元君は「近在の者ではなく遠来の者をものを助ける(照遠不照近)」といわれ⁽⁴⁾、まつりは近隣の村ではなく、おもに北京市街区全域、天津、そしてさらに広い地域からやって来る人々によって支えられて、少なくとも清末には、会期中の参拝者数十万、まちがいなく北京の春を代表するまつりの一つであった⁽⁵⁾。

妙峰山の碧霞元君廟は、泰山の神である東岳大帝の娘ともいわれる道教系の女神、碧霞元君を主神とするが⁽⁶⁾、しかし、碧霞元君信仰によるのみでは、このまつりを説明することはできない。碧霞元君は華北に普遍的な女神の一つであり、北京にも五頂(東頂・南頂・西頂・北頂・中頂)と総称される五つの碧霞元君廟をはじめ、多くの碧霞元君廟があって、碧霞元君にその重要な職掌である子授けや女性の保護を祈るだけならば、わざわざ険しい山道をたどって妙峰山へ行く必要はなかった。また、妙峰山の開山の時期は旧暦 4 月 1 日から 15 日であり、碧霞元君の誕生日であるはずの 4 月 18 日にはすでに閉山している。また、後にも述べるように、参拝者にとってこのまつりに出かけることは、碧霞元君と多くの共通点をもつ観音菩薩をはじめ、他の神への信仰となんら抵触しないことであった。

北京の西郊にある妙峰山の周辺には、唐あるいはそれ以前の北魏の時代から寺院が置かれ、古くから仏教的な聖域があった。じっさい、碧霞元君廟には、道士がいたこともあったが、民国 25 (1936) 年当時には僧が主持してい

たという⁽⁷⁾。現在は宗教専従者はおらず、北京市門頭溝区の行政当局が管理している。

では、碧霞元君信仰以外になにによってこのまつりが説明できるかといえば、それは、年にいちどの「春山入り」と、自らに苦を強いつつ聖地に出かける「聖地巡礼」であろう。春の訪れとともに山に入って新しい生命を得るための行事は、中国にかぎらず日本でもひろく行われてきた。妙峰山のまつりに行けば「福をもって家に帰る（帯福回家）」ことができるとされ、またじっさいに人々はこのまつり特有の花飾りを身に帯びて下山した。これは、山入りによって得た新しい生命力が、世俗的なわかりやすいかたちで示されたものと考えられる。

また、聖地巡礼においては、しばしば宗教が混淆し、また、そこに参加する人々の間に一種独特の連帯感が生まれるといわれる⁽⁸⁾。妙峰山のまつりにおいて、道教と仏教、また碧霞元君と観音菩薩をはじめとする他の神々とのあいだで、実質、宗教が混淆の状態にあることは先に述べた。また、まつりの日には妙峰山上や参道に、このまつり特有の快い雰囲気満ちていたことを、いくつかの資料が知らせてくれる。たとえば、1919年の新暦5月のはじめ、すなわち北京市内で五四運動が起ころうとしていたそのとき、妙峰山のまつりに出かけた修明法師は、山のようにすをこのように表現している。

次の日（4月2日）山に登り、澗溝にそって行く。多くの「茶棚」があって、無料で茶、粥、饅頭^{マントウ}を供している。「縫鞋老会」の設置した靴の修繕所も参拝者のために無償の奉仕をしている。団結と敬虔の雰囲気が全山に濃く満ちて、まるで別世界であった⁽⁹⁾。

妙峰山のまつりは、中国で最初に本格的な民俗学のフィールドワークが行われた場としても、というよりはむしろ内外の研究者にはそうした場としてこそ、よく知られている。1925年、北京大学研究所国学門の研究者、顧頡剛ら5人が、妙峰山のまつりで実地調査を行い、その成果を『京報副刊』紙上に発表、のちにそれらは単行本『妙峰山』にまとめられた。中国の伝統的知識人の精神が残存する、というよりはまだそこから人々が脱却していなかった時代に、研究の価値さえほとんど理解されない中、書齋の人であった研究者が苦勞をして山にのぼり、強い問題意識と内発的動機をもって行ったこの調査は、草創期の研究がもつ長所を充分に有して、現在でもその価値を

減じていない。この顧頤剛らの調査報告にも、おそらく印象的であったのだろう、参拝者たちが見知らぬどうし、互いに声をかけあって山道に行くことが、再々報告されている。往路は、「信心、信心（虔誠、虔誠）」、復路は「福もって帰ろ（帶福還家）」が、決まりことばであったという。

妙峰山のまつりを描いた図が、少なくとも三幅現存する。その中でもとくに首都博物館所蔵の「妙峰山進香図（一名妙峰山廟会図）」は、内容的にも充実したものである。横 121 cm×縦 160 cm の大幅は、参道の途上にある大覚寺の山門を境に大きく二つの部分に分かれる。上は山々を描き、妙峰山碧霞元君廟にいたる道を人々が行きかう。下は大覚寺の門前で、武術や舞踊劇（秧歌）などの芸能を披露する人々、参拝者に茶を供する人々、そして道行く老若男女を描く。図中の人々はみな生き生きと多く楽しげであり、往時の様子を彷彿させる⁽¹⁰⁾。

こうした雰囲気や醸成した大きな要因が、先の修明法師の記録にもあった、山道に行くまつりの参拝者のための休憩所「茶棚」と、おもにそこで各種のサービスを提供する、日本でいえば講に近い組織であった。これは、「会」「聖会」「善会」「香会」などの名で呼ばれるもので、職掌別に「茶会」「粥会」などの名を持つこともあれば、また、皇帝のお墨付きを得て「皇会」、創設後百年以上を経過して「老会」と呼ばれることもあった。参道を補修する「修路会」、参道の灯籠を提供、管理する「燈会」、参拝者の履き物を修繕する「修鞋会」など各種の会があり、参拝者はこれらのサービスを無償で享受することができた。さらに、各種の芸能についても、同じようにそれを行ったのは非営利組織であり、山上や茶棚付近で参拝者を楽しませた⁽¹¹⁾。もっとも、無料とはいえ、人々はなにがしかの「布施」を置いて行く。だから、茶棚の主宰者にはまつりのときの「収入」だけで一年を過ごすことのできる人もあったという⁽¹²⁾。

往時、北京の市街地から妙峰山の碧霞元君廟へ行くには4つのルートがあった。市街から西に向かい、石景山・三家店を経て永定河に沿って行き、南から山に入る「南道」。距離はあるが平坦で、現在ではほとんどの人が車の通るこの道に行く。北京を北に出て海淀を経由する道は、北安河に至って二手に分かれる。大覚寺に出て山にのぼる「中道」は最短だが急峻で早く廃れ、1925年の時点ですでに行き交う人も少なく、茶棚もなくなっていたという。

「妙峰山進香図」に描かれているのはこの道である。もう一つの「中北道」は顧頤剛らが行った道である。さらに北の聶家荘から西に向かい、双龍嶺を経由するのが「北道」である。このうち最短の中道でも北安河から碧霞元君廟まで35華里、市街の西直門から北安河までが51華里だから、合計86華里になる⁽¹³⁾。顧頤剛らは朝8時に人力車で市内を出、9時海淀、午後2時に北安河着、これから徒歩で夜9時に山上に到着している。現在、南道を廟のすぐ下の駐車場まで車で行っても、市街地から2～3時間はかかる。これがあるいは五体投地しながら、あるいは提灯をぶらさげたはりがねを腕の肉にとおして、行くものもあったという。

現在は、山上に粥棚が1、茶棚が2あるだけのようなのだが、往時は徳勝門外の「最初の茶棚（頭一道茶棚）」にはじまり⁽¹⁴⁾、顧頤剛らが輿担ぎの人夫からきいたものが31、顧頤剛らが存在を確認したものが22、『妙峰山瑣記』によれば、計90カ所にものぼったという。茶棚には、まつりのときにだけムシロで臨時で作られるテント状の、文字どおりの「棚」もあれば⁽¹⁵⁾、また、山中に建てられた歴としたれんが造りの建築物もあった⁽¹⁶⁾。

茶棚は、たんに茶や食料を供する休息の場ではなく、碧霞元君像が安置された宗教的な空間であった。顧頤剛は、はじめて妙峰山のまつりを訪れたときに見た茶棚の様子を次のように記している。

小さな廟一つまり4年前、驢馬ひきが教えてくれた茶棚一ごとに、かねを打ち、茶歌・粥歌をうたって、廟の内外には無数の参拝者が休息している。来る人ごとに神像のまえに進み出て、叩頭する⁽¹⁷⁾。

茶棚では、このように「茶歌」「粥歌」がうたわれており、妙峰山のまつりの大きな特徴になっていた。茶棚で実働する「都管」と呼ばれる人たちが、ひとりであるいは掛け合いでうたったという。うたは、道行く人への呼びかけでもあり、また慰めでもあった⁽¹⁸⁾。

2 粥 茶 歌

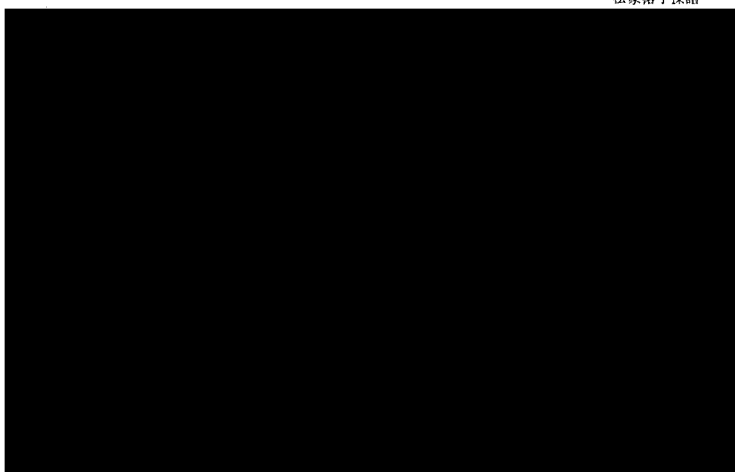
これまでに筆者が知り得た粥茶歌は16首、うち文献をとおして知り得たものが7種、現地調査で得たものが2種9首である。

現在も山上では粥が給されていてすこぶる美味であった。厨房である小屋

から粥がバケツに入れられて出てくると各自でよそい、屋外の机の上におかれた漬け物とともに立って食する。無料であるが、みないくらかのころごしを置いてゆく。施主と喜捨の金額あるいは米の量を記した表も掲げられている。神像もなく、ただの供給ステーションではあるが、食事をともにすれば気持ちもほぐれ、往時の雰囲気を多少ともうかがうことのできる空間であった。そこで、いまも「粥歌」「茶歌」がうたわれていた。

粥茶歌 A [節録]

孫徳権・歌
松家裕子採譜



A 回香宝香爬香跪香

提灯帶鎖来喽哎

参完駕就落坐来喝粥来哎

噲着風兒聞也聞不見

順着風兒十里香啊粥来哎

一碗粥啊上之山你就朝之金頂喽哎

両碗粥児啊帶福還家永平安喽哎

要喝粥你就自己来取喽哎
 管了盛就不管送粥来哎

山から下りて 山に上って(?) ひれ伏して 跪く
 提灯を下げ 鎖を巻きつけ
 神さまを拝んだら 腰を下ろして お粥を食べてくださいな

向かい風なら 匂いは届かぬ
 追い風ならば 十里先までよい香り

一碗食べたら 山にのぼり 妙峰山にお参りし
 二碗食べたら 福を授かり 家に帰って いついつまでも平安に

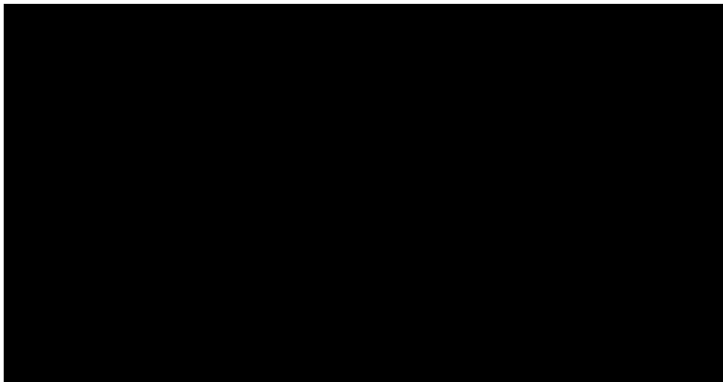
粥がいるなら 自分でお取り
 よそいはするが お手許までのお届けまではご勘弁 (譜例 A)

「宝香」は「保香」の字が当てられることもある。提灯を下げたり、鎖を身に帯びたりするのは、先にも触れたように自ら強いる苦行のさまである。金頂は、市内の「五頂」にたいして妙峰山の碧霞元君廟をいう。

このうたをうたっておられたのは、地元潤溝村に住む64歳の孫徳権氏である。茶会など「会」に関係していたわけではなく、若いころ好きで聴き覚えたのだという。ハンドマイクを手に、もっとも目立つ場所に立ち、「工作証(身分証明書)」胸にされていたから、お墨付きをもらってうたっておられたのだろう。

『中国民間歌曲集成』北京巻には妙峰山のまつりの「粥茶歌」が6首収録されており、そのうち1首(歌番号310)は地元門頭溝区のものである(譜例B)。門頭溝区のどこで、誰によってうたわれたのか記されていないが、孫氏のうたは歌詞からみても、旋律からみてもこれとたいへん近いものである。

粥茶歌 B [節録]

歌・不明
陳樹林採譜

孫氏のうたわれた歌詞をもう一つ挙げる。

- C 千山万水朝之金頂就拜見聖母喽哎
 一片(?) 虔心升升(?) 有靈了哎
 上山朝頂□□(2字不明) 香您就增福延寿喽哎
 帶着福兒還家来喝粥来哎
 要喝粥您就自己来取
 管了盛就不管送粥来哎

千の山 万の川を踏み越えて 妙峰山にお詣りし 聖母さまを拝みます
 敬虔な心で祈れば 靈驗もあらたかに(?)
 山にのぼり 廟に詣でて 線香をあげれば(?) 幸せは増し 寿命は
 延びる
 福をもって家に帰る(その途中) 粥でも食べて行きなされ
 粥を食べるなら 自分でお取り
 よそいはするが お手許までのお届けまでではご勘弁

聖母は碧霞元君である。孫氏は筆者の要求にこたえて、あるいは自発的に、

小休止してはうたわれて、計7回分をビデオカメラに収めることができた。旋律は基本的には同じだが、同じうたの1番、2番と呼ぶには毎回少しずつ異なっていた。歌詞もそれぞれに違っていたが、内容は限定されており相互に重複も多かった。孫氏によれば、歌詞や旋律に即興性はなく覚えたままをうたっているということだった。しかし、それは現代日本に住む我々が「覚えたとおりの」という意味とは違う。活字や近代的な媒介に拠らない生きたうたのすがたとは、本来このようなものであったのだろう。孫氏は粥棚近くにあった歌詞の書かれたパネルの前でも、その歌詞のとおりにはうたわれなかった。

山上の茶棚は、粥棚とちがいで、往時のありさまをかなり留めていた。建物内はほぼ神殿とかわりなく、像が安置され、その前の卓には湯飲み（茶杯）や皿がぎっしり飾られている。外には「某某茶棚」の扁額が掲げられ、会の象徴であるペナント（会旗）も見られた。屋外には、特徴のある丸いかたちをした伝統的な道具入れ「会籠」が置かれ、茶が給されていた。

その一つの主宰者（会首）で、ひとりで茶棚を守っておられた倪振山氏が、こちらのたつての願いをいれてうたをきかせてくださった。先の孫氏と違い、近在ではなく北京の豊台区分鐘寺村に住む。みずから「茶会」とさらにまづりに先だって神像のほこりを払う「擇塵聖会」を主宰しておられる。

D 噲着風兒聞也聞不見啊哈嗨
順着風兒十里香茶来哎

喝茶你要先来朝頂来啊哈嗨

喝粥你就自己兒来取
管了盛兒不管送粥来

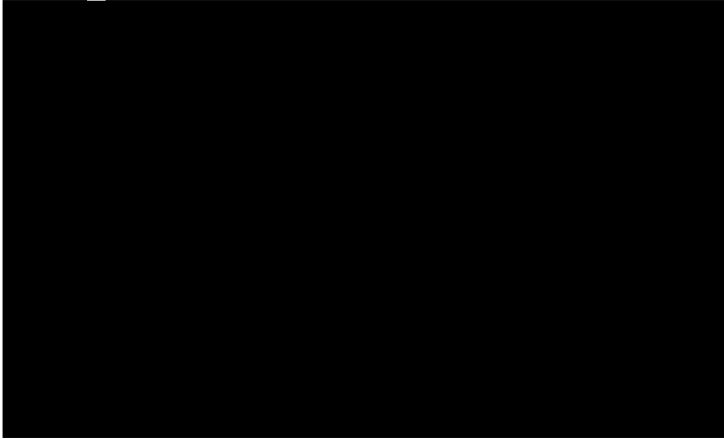
向かい風なら 匂いはしない
追い風ならば 十里先まで香りが届く

お茶を飲むならまず拝みなされ

粥を食べるなら 自分でお取り
 よそいはするが お手許までのお届けまではご勘弁

粥茶歌 D 〔節録〕

倪振山・歌
 松家裕子採譜



倪氏は「うたは家の先代のものから習った」といい、むかしは崇文区の「娘娘廟」に住んでいたということだった。そこは妙峰山の「娘娘」、すなわち女神の実家であり、そのまつりは妙峰山のまつりが終わる旧暦4月15日からはじまったという。倪氏自身は観音菩薩を信仰しており、茶棚に安置してあるのも観音菩薩であったが、それでもこの碧霞元君は「とてもご利益がある（很霊）」と言っていた。妙峰山の神さまは「很霊」だということばは、翌日訪ねた大覚寺の前で線香を売っていた中年女性の口からもきいた。

歌詞だけをみると、倪氏のうたと孫氏のうたはほとんどかわりがないが、メロディも聴いた感じもまったく違った。孫氏のが剛とすれば、倪氏のは柔、やわらかい調子が耳に快く、それを告げると、「あっちは妙峰山の、こっちは北京のだ」と、いささか誇らしげだった。詳しい事情は聞けなかったが、むかしの北京の「呼び声大王（叫売大王）」は、自分の兄弟子だといっておられた。

倪氏はうたが掛け合いでうたわれたことを強調された。『中国民間歌曲集

成』収録の6首のうち2首も、音頭取り（領）と合唱（衆）の掛け合いであることが示されている。しかし、掛け合いならば内容がどんどん広がっていくのではないかと問いたくは、「内容は豊富だ」といいながら、妙峰山参りの範囲を出ることはないという答えだった。碧霞元君その人やその信仰にまつわる叙事性のあるうたなども、ないということだった。

粥茶歌の歌詞の内容はこのようになんかなり限定されていて、しかも相互で重複することが多い。筆者は豊かな内容と展開を期待していたのだが、知り得たかぎりではこれはなかった。うたには娯楽性はもちろん、宗教性も稀薄である。

旋律については、一見、歌詞と異なり、いろいろに展開しているようにみえる。しかし、Aでは12・13小節、Bでは11・12小節にあらわれる「ミ（レ）ドレミ」、また、Aの5～7小節とBの4～6小節に共通の「ラド（ソ）ラソミ」は、A・Bだけでなく、『中国民間歌曲集成』に収録された他の粥茶歌、すなわち（一）崇文区のもの、（二）西城区のもの、（三）東城区のもの、（五）石景山区のもの、（六）西城区のもの、すべてに共通に、しかも複数回あらわれる。それだけではなく、はじめまったく別個のうたにきこえた倪氏のうたにも、やはりこれら「ラド（ソ）ラソミ」と「ミ（レ）ドレミ」は含まれている。この事実は、多くの茶棚でうたわれていた粥茶歌が、もとをたどれば同源であることをうかがわせる。

妙峰山のまつりにかかわる最も重要な問題は、このまつりが、いつからどのようにしてはじまり、そしてなぜかくも多くの人々を集めることになったのかということであろう。広い地域にわたって多くの茶棚が存在すること、そして、そこでうたわれるうたの歌詞と旋律に共通性がみられることは、このまつりの発展が自然発生的なものではなく、なにか大きな力が背後ではたらいた結果であることを予想させる。

お わ り に

粥茶歌についてこれまでに得られた成果は十分なものではない。ごく短時間の調査で、民間歌謡に、しかもその豊かな世界に出会うのは容易なことではない。芸能の披露はまつりの初日に来なければ見ることができないという

ことも、山上で初めて知った。まつりも明日が閉幕という日に訪れた現代の妙峰山の参拝客は、たった1日だけ訪れた筆者には、多く観光客であるようにみえ、そこに「聖性」を感じとることはむずかしかった。中国の文化において、聖性は合理精神や俗＝日常性によって覆われやすい。しかし、それはないわけではなく、見えにくくなっているだけだ。聖性と同じように、女性のすがたも、「会」など特徴的な部分のみに目を向けていると見えてこない。「会」には伝統的に女性は組織されてこなかった。しかし、妙峰山のまつりを支えたのは、じつは多くの信心深い女性たちでもあった。まつりには、ふだん外出を禁じられている女性たちが、「子を授かるため」という大義名分を得て多くやってきた。「妙峰山進香図」には、何人もの女性が夫や子どもとともに描かれている。『妙峰山瑣記』の著者、奉寛は、はじめは母と、またのちには妻とこのまつりに来るのが毎年の恒例であったと言っている。『妙峰山』には平素家を一步も出ない少女が、神の加護を得たのであろうか、険しい山道を徒歩で登り切ったことが記されている。また、北京の俗曲、長篇の「馬頭調」には、奥様の妙峰山詣のさまがこまかにうたわれている⁽¹⁹⁾。むしろ、翌日尋ねた大覚寺に「今日は妙峰山の『娘娘』のまつりの終わる日だから」と参りに来ていた近在の老嫗が、筆者の求めているものをなにがしが体現しているようだった。そして、この女性から拒絶にあって話をきかせてもらえなかったことが、また、調査のむずかしさを象徴していた。

それでも、聖地にみずから赴いたこと、粥茶歌をいくつかじっさいに耳にし得たこと、またそれを熱心にうたい、聴く人々がいたことを身をもって知ることができたことは、やはり大きなよろこびであり、また収穫でもあった。

今回の調査は単独で行ったが、とくに2回目の調査はおふたりの歌手のほかにもいろいろなかたにお世話になってはじめて成ったものである。京都大学人文科学研究所の小南一郎教授と京都外国語大学竹内誠教授から、京都外国語大学に外国人講師として来日中であった北京師範大学中国文学学部（中文系）の鄒紅教授を紹介していただき、鄒教授を通して同学部民間文学教育研究室主任の劉鉄梁教授と連絡を取り、劉教授のご指導と教授の博士課程の学生である康麗さんの周到なお世話で調査を行うことができた。妙峰山行きにはまた、同学部のロシア文学教育研究室の李正栄教授が専門外であるにもかかわらず同行して、多くの写真を撮ってくださった。このうち、とくに康

麗さんは、現地調査の2日間筆者を助けて奮闘し、また歌詞の書き起こしを助けてくださった。この場を借りてみなさんに衷心よりの感謝を表したい。

注

- (1) 李春仁「妙峰山廟会的歴史沿革」(劉錫誠主編『妙峰山・世紀之交的中国民俗流変』所収) 参照。
- (2) 現地調査は2001年9月16日と、2002年5月25日に行った。1回目は2001年度追手門学院大学学内共同研究の補助を受けた。2回目は旧暦4月14日で、まつりの会期中であった。
- (3) 容庚「碧霞元君廟考」および莊嚴「妙峰山進香日記」(いずれも『妙峰山』所収)による。『宛平県志』は容庚の引用による。現状は筆者が確認した。
- (4) 大覚寺の門前で線香を売る女性からきいたことば。顧頡剛『妙峰山』にもこのいいまわしが記録されている。
- (5) 『燕京歲時記』四月 妙峰山碧霞元君廟、在京城西北八十餘里。山路四十餘里，共一百三十餘里。地属昌平。每届四月，自初一日，開廟半月，香火亟盛。(中略)自始迄終，繼晷以夜，人無停趾，香無断烟，奇觀哉。(中略)廟無碑碣，其原無可考。然自雍・乾以来，即有之，惜無記之者耳。(中略)以各路之人計之，共約有数十万。以金錢計之，亦約有数十万。香火之盛，実可甲於天下矣。
周作人「北京的春天」(『北平一顧』所収) 老实說，我住在北京和北平已將二十年，不可謂不久矣，對於春遊却並無什麼經驗，妙峰山雖熱鬧，尚無暇瞻仰，清明郊遊只有野哭可聽耳。
- (6) 碧霞元君については、容庚「碧霞元君廟考」(顧頡剛編著『妙峰山』所収)、羅香林「碧霞元君」(『民俗』第六十九・七十期合刊「妙峰山進香調査專号」) 参照。
- (7) 奉寬『妙峰山瑣記』による。
- (8) 岩波講座『日本文学と仏教』第七卷 靈地(1995)，うちとくに今野國雄「第四部 聖地と巡礼」参照。
- (9) 修明法師「朝拜妙峰山娘娘頂雜記」(一九一九年，農曆四月朔……) 次日登山，沿澗溝，有茶棚多次，無償供給茶水，粥，饅首。縫鞋老会組織的縫鞋站亦為香客義務服務。濃厚的團結虔誠之氣氛充盈全山，宛然別一番天地。
- (10) 「妙峰山進香図」は清のもので，軸装。製作は，清朝の中～後期と推測されるが，正確な年代は不明。筆者は首都博物館で実物を見ることを得た。これについては別に報告する予定である(掲載は未定)。なお，他の二種とは，首都博物館蔵「妙峰山過会図」(『燕都』総29期，1990年1期裏表紙掲載，カラー)，および中国歴史博物館蔵「妙峰山進香図」(『妙峰山・世紀之交的中国民俗流変』見開き掲載，白黒)である。
- (11) 「香会」は，顧頡剛「妙峰山の香会」(前掲『妙峰山』所収)から現代の吳効群「悄然復興の北京老会」(『民間文化』1999年第2期，1999年5月15日)まで，妙峰山のまつりの研究の中心テーマであり，すでに多くの報告がある。

- (12) 陳雷「妙峰山の茶棚と茶棚小調」による。
- (13) 參道の経路と里数は、顧頡剛「游妙峰山雜記」(『妙峰山』所収)に與担ぎの人夫たちの情報として記されたものである。
- (14) 筆者は山上でその関係者だったという恵文氏から話をきくことができた。しかし、多くはすでに報告されている内容であるからここには記さない。
- (15) たとえば 雑誌『民俗』第六十九・七十期合刊「妙峰山進香調査專号」中の写真のうち、妙峰山香会中之風物の(十)進香路中の茶棚。
- (16) たとえば、王化君「妙峰山万縁同善茶棚」(『燕都』総13期, 1989年8月)がこれにあたる。顧頡剛も「妙峰山瑣記序」(『民俗』第六十九・七十合期所収)で、「只有從三家店到妙峰山的一條路上屢屢看見小而新的廟, 一座座地関着門, 覺得有些奇怪, 問驢夫, 說是茶棚」と述べている。その他, 茶棚については, 常華「妙峰山朝山進香老北道考察記」, 陳雷「妙峰山の茶棚と茶棚小調」が詳しい。
- (17) 顧頡剛「妙峰山瑣記序」(『民俗』第六十九・七十合期所収)
每座小廟——即四年前的驢夫告我的茶棚——又都擎着磬, 唱着喝茶喝粥的歌, 廟内外歌着無數進香的人, 每到一個人就到神座前, 磕一個頭, ……。
このほか, 李家瑞『北平風俗類徵』歳時・四月の項に集められた妙峰山のまつりについての記事にも, いくつか茶棚の様子が記されている。
- (18) 『妙峰山瑣記』 執事者当案唱叫粥茶, 衆合之。脆韻曼声, 与磬音相雜, 山鳴谷応, 裊裊宜人。
- (19) 『北平風俗類徵』歳時所引, 百本張鈔本 馬頭調「妙峰山」。

参 考 文 献

- 奉寛『妙峰山瑣記』国立中山大学民俗叢書, 出版年不明(民国15年“写畢”)。
- 顧頡剛編著『妙峰山』上海文芸出版社, 1988。国立中山大学語言歴史学研究所, 1928の影印。
- 李家瑞編『北平風俗類徵』上海文芸出版社, 出版年不明, 商務印書館, 1937の影印。
- 雑誌『民俗』第六十九・七十期合刊「妙峰山進香調査專号」, 1929年7月24日。
上海書店, 1983年影印・合訂版。
- 『北平一顧』宇宙風社, 1936。
- 常人春『老北京的風俗』北京燕山出版社, 1990。
- 劉錫誠主編『妙峰山・世紀之交的中国民俗流變』中国城市出版社, 1996。
- 韓春鳴編著『妙峰山簡介』北京市門頭溝区旅游事業管理局・北京市妙峰山旅游管理处, 出版年不明。
- 『中国民間歌曲集成』北京卷, 中国 ISBN 中心, 1994。
- 羅明成「妙峰山善会の世俗価値」(『民俗研究』1996年第2期, 1996年4月15日)。
- 吳効群「北京碧霞元君信仰与妙峰山庙会」(『民間文学論壇』1998年第1期, 1998年2月15日)。
- 吳効群「妙峰山: 北京的香会組織及其“政治”活動」(『民俗研究』1998年第2期, 1998年4月15日)。

- 吳効群「悄然復興的北京老會」(『民間文化』1999年第2期, 1999年5月15日)。
- 修明法師「朝拜妙峰山娘娘頂雜記」(『文史資料選編』第30輯, 1986年12月所收)。
- 常華「妙峰山朝山進香老北道考察記」(『文史資料選編』第53輯, 1996年12月所收)。
- 王化君「妙峰山萬緣同善茶棚」(『燕都』總13期, 1987年8月所收)。
- 陳雷「妙峰山的茶棚與茶棚小調」(『文史資料選編』第30輯, 1986年12月所收「妙峰山三題」の一)。
- Naquin, Susan. "The Peking Pilgrimage to Miao-feng Shan: Religious Organizations and Sacred Site." Pilgrims and Sacred Site in China, edited by Susan Naquin and Chun-fang Yu, 333-377, University of California Press, 1992.